

## 〔巻頭言〕

## 体験を通して実感する本学紀要の意義

地域基礎看護学領域 森 仁実

本学の紀要は、開学初年度の平成13年3月に第1巻が発刊されて以来、毎年1～2巻が継続的に刊行されている。巻末の投稿規定に示すとおり、本学大学院修了者(学位論文の公表に限る)にも投稿資格が認められているが、主たる投稿者は本学教員となっている。紀要の目的は各機関によって異なるため、査読がない、論文の字数制限がないなど投稿規定にはかなり違いがあるようだが、本学の紀要は、講師以上の学内教員に査読を依頼し、その意見をもとに紀要編集委員会が論文掲載の採否を決定する仕組みになっている。

筆者は開学時から本学教員として勤務していることもあって、「投稿者」「査読者」「紀要編集委員」など様々な立場で紀要編集に関与してきた。振り返ると、それぞれの立場を通して論文公表の作業に携わる中で、自分の学びになったことがたくさんあったと感じる。筆者は講師5年目の年に当時の紀要委員会の一員になり、査読結果をもとに論文公表をめざす投稿者にどうコメントするか、結果を返すか等の審議に参加することになった。審議のため委員(筆者以外は教授)の先生達と意見交換する中で、論文を読む時の視点や論旨の一貫性とは何を意味するのかを学ぶ機会になった。とはいえ、それだけで自分の査読する力が高まるわけではなく、「査読者」としてコメントする際には、いつも悩みながら査読結果用紙を書いてはいるが。紀要への投稿で筆者が最も苦勞した論文は、博士論文の公表を目的にした時で、掲載に至るまでに2年を要した。1年目は投稿したものの、査読の指摘をもとに修正するには大幅な見直しが必要で、とても提出期限に間に合わないかと判断したため、途中で投稿を取り下げる結果となった。たぶん2～3回だったと思うが、査読者および紀要編集委員会から丁寧なコメントをもらい、考察に不可欠な結果をはっきりさせる必要性、並びに結果に対応する方法(何を意図してデータを収集し、どのように分析したか)をきちんと説明する重要性を認識することができた。掲載には至らなかったが、筆者なりに改善すべきポイントをつかむことができたので、原著論文をめざして再トライしようと気持ちを切り替えることができ

た。2年目には、前述のポイントを踏まえて修正した論文を再投稿し、著者にとって初めての単著による原著論文を公表するに至った。

令和2年度からは再び紀要編集委員の立場になったが、これまで本学紀要との関りで学んだことや所属する学会の学術雑誌の査読委員の経験も踏まえ、筆者なりに投稿された論文に向き合ってきたつもりである。第14巻1号の巻頭言で田村正枝先生が「投稿された論文は・・・苦勞による成果物であることを考えて、一つひとつ丁寧に投稿者の意向を尊重して読んでいく。論文のよさは何処にあるのか、また、どこを修正すればより質が高く、読者に理解されやすい論文になるかを考えて読み」と書いておられ、このような読み方を筆者もめざしてはきたが、わかりやすく建設的なコメントをすることの難しさを感じることは、いまだに少なくない。筆者は定年により今後は本学紀要に関わることはなくなるが、投稿者・査読者など立場は異なっても紀要編集に関わる意義は大きいと思うので、貴重な学習の機会と捉えて、これからも本学紀要を大いに活用していただきたい。